
グリンピース

しゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリンピース

【著者名】

しゅん

【あらすじ】

純一は夜になつて夢をみた。その夢は現実かのようになつたりして毎日続きを見れている事に怖くなり悩んでいた。そのうちにその夢は息をした生き物のように別の世界に純一はドンドン引きずられていいくのであった。

第1章　この夢なんだよ

純一は、ハツとして目が覚めた。何でこんな夢を見たんだろう。夢と思わない現実的なこんな夢を見たのは初めてだ。確かに夢は脳が休まずに動いている作用がきっと、リアルに見えると思うが、あれはどう見ても余りにも夢とは思えない。純一は呆然としていたが、学校に遅刻すると現実の生活にベットから起き、トイレに向かうであった。

「よ、おはよー」
裕信が純一の肩を叩いた
「あ、おはよー」
「何かうかない顔してんな。どうかした？」
「お前さ。夢つてよく見る」
「まあ、見るけど、そういう、俺怖い夢見た。それがさ。ガミガミ怪獣が出てきて俺はもうすぐで遭られる所だったよ」
「なんだって、ガミガミ怪獣つて」
「俺のお袋。夢の中でも口煩く言つてさ。そのうち火を噴くんじやないかって、おおこねー。お前はどんな夢を見るんだよ」
「俺か、いいやそんなに見ないよ」

純一は今朝見た夢の話をしなかつたが、言つても何か解つて貰えないような気がしたからであつた。純一はその夢が頭から離れないでいた。そう言えば前にも似た夢を見たことを思いだした。だが、今回は強烈であつた。夢の世界で感情を持つことが不思議であつた。寝ているのに心の作用が働くのは何故だろう。昔から夢に纏わる話はいくらもあるが、また、テーマにして研究して発表をしているが、まだこれって判明がないような気がする。死と同様色々な言葉が飛び交うがこれって違う確証がなにような気がする。

純一は「普通の高校」一年生、彼女がいる訳でもなく友達もそこ
そこの、家は公務員の父を持ち、二つ下の妹がいる。毎日平凡な
高校生活を送っているのであった。寧ろ何もないことが悩みのよう
に思えて、もっと刺激的なことがこないかと思つていた。いや、ド
ラマのようにある訳がない。これが俺の人生なのかなと、何か夢を
持つでもなく、大学へ行つて社会人になつて、相手が出されば結婚
もし、子供も出来て淡淡とした退屈な道が持つているのかと、自分
の先を想像しては、あーとあくびをしたいような毎日だと人生を達
観していた。

また晩が来た。今朝夢を見たことをすっかり忘れて純一は深い眠
りに着くのであった。夢の中で純一は階段を降りていた。その階段
は白い螺旋になっていた。「あれ、これって同じ」と純一は気が付
く。その階段を降りた先には、女の子がいた。

「ここには、純君」

「えっ、君僕のこと知つているの」

「もう、忘れた。昨日、君が言つていたんだよ。僕の名前は滝野純

一ってね」

「そうだった。つてことは君と毎日こうして会つてること」

「そうみたい。君が夢を見てくれたらね」

「ちょっと、待つてよ。夢つて同じ夢も見れないし、まして昨日の
続きなんてよけいにないよね」

「まあ、深く考えるはよそよ」

「あつ、君の名前は、これも僕が訊いたかもしけいなけど
「そうね。今度は忘れないでね。美樹」

美樹は小柄で白のティーシャツにショックのミニスカートを履い
ていた。笑うと八重歯が見え純一と同じ年齢の十七歳である。
「ここつて何処なの?」純一が訊いた。

野原で他に何もない。空だけが青く隅渡つていた。春の心地よい

暖かさでこの空間に安堵感を憶えるのであった。

「純君、この世界君が住んでいる所と違うの分かってない」

「えつ、て言う事は現実ではないってことだよね」

「そう。私は君が住んでいる世界にはいけないから、純君が来てく
れないと私と会えないってことかな」

「でも、この世界って何」

突然美樹は大きな声を出して笑いだした。

「何が可笑しいの」

純一はムツとした顔になり、こっちが真剣に言つてるのに美樹
の態度に腹ただしく思えるのであつた。

「あつ、ごめんね。だつて、この世界つて純君の世界みたいなもの
じゃないの。君が寝ると夢を見る。だから君が描いているのと同じ
だと思うんだけど」

「でも、僕には分からないよ。だつて、夢つて毎日同じ場面で見る
だろうか、そして、僕は美樹ちゃんといつして話してくる。あーわ
からないよ。現実か夢なのか」

純一は頭を搔き、どうなつているのか訳分からないと言つ表情を
みせた。

遠くからトンビの声が聞え一人の頭を飛んでいった。飛行機雲が
一本斜めに線が引いて飛行機が飛んでいる。まったく現実の世界と
変わらないような気がした。

「こいつて、夢の世界だよね。だつたら僕が行きたい所へでもいけ
るの」

「そうだよ。そんなこと朝飯前だよ。空だつて飛べるし、世界の何
処でもいける。時代も過去も未来だつて、自由じだいだよ」

「そうか。でも、よく分からないよ。僕が不思議なのか。君が不思
議なのか」

「くつす」美樹は笑つた。

「えっ、何」

「だって、この世界は純君の世界なんだよ。だから純君が自分のしたいことをし放題だよ」

美樹は下向きに顔をして分かつてないよなつてでも思つよつた顔した。美樹は背を向け歩き出した。その後に純一が美樹を追いかけしていくように付いて行つた。何処からきたんか真っ白に蝶が飛んできたと思つた瞬間一面が名の花畠に変わつていた。美樹はさつさと歩いていくので、菜の花畠の中に紛れてしまい行方を失つてしまつた。そのとき純一は目が覚めた。

朝になつてカーテンの横から朝にの光が差して純一は寝とぼけた顔をしてボーとしていた。まだ、鮮明に夢が頭の中に残つてゐる。いつたい続いて同じ夢を見るんだろう。美樹って誰んだよ。これつて怨念？亡靈、幽靈つて言う類。僕は何かに取りつかれていの。

第2章 夢つて見るの、叶えるのむか?

今日は学校の休み土曜日だ。純一はパジャマのままでリビングにいき、テーブルの椅子に座った。父修一がすでに座つて新聞を見ていた。

ア と大きな口を開けて純一はあくびをした。

「お前は進学を考えているんだろうな。お父さんお前の口からどこの大學生へいくのか聞いていいぞ」

「そこそこの所に受験するよ。別にどこへ就職つて考えててないから、親父見たいに公務員にでもなるかな」

「簡単にいってくれるなよ。役所で働くつと思つたら、倍率が高いからなかなか入れないぞ」

「そうよ。あんたのレベルだつたら厳しんじゃないの」

母麻美が台所から朝ご飯をテーブルに置いた。麻美は昔からあまり勉強のことは言わない方で、放任主義なのか麻美の性格なのか、その為子供達はどこか余所の子に比べるのんびりしている所があり、家族の中で一番のんびりした者が階段を降りて、リビングに入ってきた。

「おはよう」

妹の美菜が椅子に座つた。

「美菜。昨日帰つてくるのを遅かつたが、本当にミクちゃん所で勉強しているの。あんたこそ受験はまじかで大丈夫なの」

「ちゃんと勉強しています。でも、私つて今の所の成績なら、そこそこいけるでしょう」

「うちではそこそこつて言つのが多いわね」

麻美は純一の顔見た。純一は飲んだ牛乳を吐きだした。

「もひ、お兄ちゃん汚いんだから」

「ほんとだ。溢すなよ。うちの子達は呑気だね」

「そう言つてこる。お父さんも私達に言えないと思つナビ」「それはどう言つとだ」

「だつて、お母さんが言つてたもん。大事な書類を忘れて役所に行つたつて、お母さんがテーブルに置いてあるのを早く気が付いたから、会議に間に合つたんでしょう」

「親父も僕達とそんなに変わらないよな」

「本当に助かつたよ。お母さんには、あれがなかつたら会議で困る所だつたよ」

修一は失敗を暴露されても怒らず、寧ろ妻に感謝の意を述べる所が純一も美菜も好きだつた。何よりそう言つ所に惚れているのは妻の麻美だつた。純一の家庭はごく普通で穏やかで波風もなく、平凡な生活を送つてゐるのであつた。

「えつ、今日は役所休みでしょ。仕事へ行くの」

美菜が言つた。

「ああ、役所は休みだが、こつちはしなければいけないことが山程あるんでね。休んでいられないんだよ」

「役所勤めも大変だね。僕公務員やつぱ止めようかな」

純一はトーストのパンをかじりながら言つた。

「そんなこと言つていたら、あんたどこも就職出来ないよ」

麻美は言葉ではあまり言わないが、内心では純一のことは気がきではなかつた。麻美の母は神経質の人で、その度に今日はどこへいく。成績がちょっとでも下がつたら、なぜこんな成績になつてしまつたのかと必こい位に訊いてくることが、思春期だつた麻美はかなり辛い思いをしてきたので、子供達は心配だが自分の思いをぶつけるのはよそうと思い、ガ と言いたいときは一呼吸して話をするように心掛けていた。

「やうだよ。お兄ちゃんもちやつとは勉強しに図書館に行つたら」「お前から言われたくない」

純一は美菜から言われてムッとした顔した。修一がリビングから出でて仕事へ行つた。

「な、お前に訊きたことあるんやけど」

「エッチのこと」

「馬鹿違つよ。お前、夢つて見る」

「夢はよく見るよ。それがどうしたの」

「じゃ、同じ夢で毎日続きたるもの見る」

「何それ、あるわけないじゃん。えつ、お兄ちゃんあるの」

「うん。僕さ。三日前から同じ子が連續で出でくるんだよ」

「うそーそれって夢じゃなくて、呪われているよ。ウワー怖いよ」

「やっぱ、幽霊的なものなのかな」

「その夢覚めたあと金縛り状態になつていない」

「いいや。普通に田は覚めて誰かが乗つているよなことないけど」

「私分かんない。でも、普通ではないよ。あつ、ミクちゃん所へ行かなきゃ」

美菜は朝食を終えて、ダイニングルームを出て一階に上がりて行つた。純一は右手を頬に当て肘をテーブルに乗せて考えていた。

麻美がダイニングに入つてきて「どうしたの。純一何か深刻な顔して、ちつとの話ちょっとと言い過ぎたかな。あんたもそれなりに進学のことは考えてるわよね。お母さん純一なら、きっと頑張つてくれると思つてているし、信じていてるから余り進学のことは口にしなようにしてるつもりなんだよね」

麻美は煩い親にならないように、子供達に気を使つていて、当の本人はそのことは何も気にしなく、夢の美樹が気になつて仕方なかつた。しばらくして純一は「えつ、そんなこと僕は全然気にしてないよ。どこの親でも進路は口煩く言つてているだろうし、僕は寧ろお母さんの子で良かつたと思っているよ。僕達の気持ちに任せてくれるから、寧ろ親を裏切つたら申し訳ないと思つよ。ありがとうお母さん」

麻美は微笑んで薄ら涙を見せるのであつた。こんなにも優しい言葉を掛けてくれる我が子が嬉しく、自分が育ててきたことは間違えない。譬え、受験を落ちたとしても焦らず子供達を信頼して見守つて行こうと思つていた。

だが、純一は要領もよく世渡り上手な所もあつた。友達は塾へ行つてゐるし、部活は英会話部に入つてゐるので休みに練習があることもなく、勉強をする気分じやないが暇なので図書館へ行くことにした。

初めは純一は参考書を広げて勉強していたが、一時間もしない内に疲れてきて、自動販売機でコラを買って休憩場で飲んでいた。ふと純一は夢に関する本はないか調べたくなつた。

人はなぜ夢を見るのか、夢は欲求不満の表れ、人間の心には自分で意識出来る顕在意識と、自分でまつたく意識出来ない部分潜在意識の一いつがある。顕在意識では脳がストップをかけていた行動を、潜在意識の中では思い切つて実行してしまつた。普段から恋人がいない場合、普段は意識してなくとも、心の奥底では寂しい自分がいてそれが夢に現れる。欲求不満だけではなく、日常生活を送つていく中で、多くの人と言葉をかわたり、新聞、テレビ、雑誌などから膨大な情報のうちの一部が何かのきっかけで夢に登場していると考えられます。

なるほど、では僕は欲求不満。彼女がいないことを寂しく思つてゐる。それで、美樹が夢の中に現れるの?なのかな。でも、僕は今所彼女が凄く欲しい訳でもないのにな。

あ一分かんない頭がおかしくなるよ。これを否定すらなら、やはり心靈、スピリチャーリー系前世、先祖、考えれば考える程頭が纏まらない。純一は本を見るのを止めて図書館から外にでた。

そして晩になり、たまたまで何も気にすることはないことを純一は眠りに付いた。

「ここはどうだらう。」と純一は夢の中で考えていた。すると大きなボールの上乗りころがしながら向ってくるのはサークスのピエロがきた瞬間にメリー・ゴーランドが廻っている。馬の乗り物に美樹が乗っていた。

「純君も乗らない」

「えつ、僕が」

と言つてゐるといつて間にか僕も乗り物に座つていた。

「なぜ、君が僕の前にこつして現れるの。君つていつたい誰なんだよ」

「うふ、私の世界じゃないてば、純君の世界よ」

「僕の世界でもないよ。僕は彼女が欲しくて欲求不満でもないし、まして寂しなんて思つてもいないよ」

「私はあなたの世界には行けないのよ。いや、私はあなたの世界では住めない」

「じゃ、僕が君に会いたい為に君の夢の世界に來てるつてこと。また、訳の分からないよ」

「じゃ分かるようにしてあげる」

「どう言つこと」

純一が言つとメリー・ゴーランドの馬が本当の馬に乗つて走つていた。その後ろを美樹も馬に乗つていていた。馬は草原のような所を駆け出している。

「えつ、何処へいくの」

「大丈夫よ。純君は何も考えずに馬のしつかり掴まつていて」

馬は凄いスピードを上げて駆け出した。野を走り谷を走りときには海の浜辺を走り抜け走つていると言つより、飛んでいるような感じであった。

「ちょっと待つてよ。えらく早いよ。怖いと言つ感覺はないが、走

り過ぎじゃないの」

純一は馬にしがみ付いていた。馬はまるで羽根が生えたドラゴンのように入つても木を倒して次から次と「これって、ダンプ?」

息も付くことなく馬は走っていた。やつと、馬は止まつた。

純一は馬にしがみ付いている為、止まつてることも分からなかつた。

「純君。着いたよ」

美樹が純一の方にきて声を掛けっていた。純一は顔を上げた。そこは高い山と山の谷間にいた。何軒か家が並び立つていた。ここの何処なんだろう。

「ここは私が暮らしている所よ」

「美樹ちゃんの住んでいる所なの。君つて田舎に住んでいるんだね。親と一緒になの」

「そうよ。両親に兄弟六人に親戚達は隣り居るわ。さあ、来て」

美樹は純一の手を引っ張るように強い力で連れていくのであつた。

「おい、そんなに引っ張らないでよ」

女の子なのに凄い力に驚き、純一は美樹のままに抵抗も出来ずに、美樹が住んでいる村のような所に連れていかれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6272y/>

グリンピース

2011年11月23日19時53分発行